

夜討ち

一

「念仏を唱えようと、よその国がこの日本の国に攻めてくるというのか」

北条重時が馬鹿ばかしいといった口調で執事の藤次左衛門に問い正した。

「御意っ」

「念仏をやめなければ、われわれ北条氏一門に同志討が起ると日蓮はいつたのだなあ」

「御意にございます。立正安国論の中においては、薬師経と仁王経を引いて、他国侵逼難と自界叛逆難の来たることを明言いたしておりますが、なおこれが上書を頼んだ宿屋左衛門に、特に言葉を改めて、禅宗と念仏宗とをとどめ給え、この事用いなき時は、北条一門よりこと起つて、他国のためにせめられると申したそうでございます」

「ううむ、まことに狂気な揚言、さりとて捨てておけば大事を招来しよう」

「御意つ御意つ、しかも日蓮、最明寺殿（北条氏五代目の執権職時頼のこと）がこの上申に返答なく、何の御汰汰もないところより、再び小町の辻にたつて、他国侵逼、自国叛逆の二難きたると毎日のように吠えたてておるとのことにございます。打続く天変地夭に動揺した民の心が、たとえ始めはそらごととわきまえておつても、度重さなつてきくうちには本当のように思いこむであります。鎌倉御所ののきばに近い小町の辻に立つて、自界叛逆の難きたるなどと叫ぶは、ただ氣違いの沙汰と申す外はございません」

「わが朝に仏教渡来後、僧は出家遁世と申して世上のことは口にすることすら嫌つたものである。故に寺々は多くの山中に建立されて俗塵を遠のけ、世に毅然とするところがあつた。しかるに彼の日蓮と称する僧侶はこれと全くあべこべである。市中の往来にたつて、諸宗の悪口をいふらし、果ては政道の上にもで口を出して他国侵逼、自界叛逆近しと叫ぶ、これはまさしく魔作沙門である、氣違ひ坊主であるところの北条重時はみる」

「御意、御意、御意、氣違ひ坊主なればこそ建長寺の道隆上人も、光明寺の然阿上人も、長楽寺の隆観上人も、寿福寺の朗誉上人も、浄光明寺の行敏上人も、極楽寺の良観上人も、皆様がすべて相手にせずにおるのでございませう。鎌倉当代のかかる名僧智識が日蓮を正氣な僧侶とみれば、なんで捨ておくことがございませう」

「藤次左衛門、もそつと近くよれ」

北条重時は執事に声を改めていい出した。

「いいかなあ、最明寺殿が殿中において寺社奉行宿屋左衛門尉光則の手を経て、上書された日蓮が立正安国論を、比企大学三郎によって朗読されたのを、最後まで耳を傾けておられたことは事実だ。だがしかし事実はそれだけだ。それだけが事実で、後には何等の御沙汰がない。いいかなあ、最明寺殿は念仏のためには長谷に大仏殿（阿弥陀の像。与謝野晶子が、鎌倉や御仏なれど釈迦牟尼は美男におわす夏木立かな、と詠じたのは有名、但しこれはお釈迦様の像ではなく阿弥陀の像の誤）を建立した御仁であり、禅宗のためには道隆上人をわざわざ支那よりお呼びして建長寺を建立された御仁である。しかるに日蓮はその最明寺殿に向かって、念仏と禅宗をすてなければ、他国侵逼と自界叛逆とが起きてくるぞといっておるのだ。日蓮に向かって何等御沙汰がないということは実は御沙汰があつたのと同様だ。この辺が政治じゃよ。御政道の妙味というのはこのことをいうのじゃ、わかるかなあ」

「御沙汰のないが御沙汰でございますか」

「左様じゃ」

北条重時は宝治元年七月より康元元年三月までの約十年間、執権最明寺（北条時頼）の連署であつた。（連署というのは連判とも加判ともいって、執権と共に公文書を署判したためにこの名称がある。執権を助けるとともに、政務の裁断、理非の判決は執権と同様に執行したのである。よ

つて北条重時が如何なる人物であるかがわかるであろう) しかも大の念仏の信者であり聖人が立正安国論を提出した文応元年の前年正元元年に自ら極楽寺を創建した。極楽寺は終生聖人の敵であった良観が住職した寺で有名である。北条重時は極楽寺を創建した故をもつて自ら極楽寺入道と称し、しかも法然上人の孫弟子修観から一字を貰つて観覚とさえ道号を名のる念仏の信者である。さて、聖人が文応元年に立正安国論を提出した時の執権職北条長時は重時の子供である。

(最明寺時頼は建長七年に執権職をしりぞき前執権として職務をとつておつた) そしてその連署政村は重時の弟であり、評定の筆頭は重時の従弟であり、次席は重時の甥である。

従弟は法然上人の高弟隆覚より受法し、甥は法然上人の孫弟子道阿弥の弟子になつておるといふ、一門が悉く念仏のパリパリの信者である。この北条重時が執事に向かつて、御汰沙のないのが沙汰であると今断言したのである。

「では、如何なることになるのでございますか、お伺いいたしますが」
執事の藤次左衛門が重時に訊ねた。

「藤次、貴殿は何年わが家の執事をしておるのだ。少し考えてみよ。御政道の妙味を展開するのだ。如何なることになるのでございますか、お伺いいたしますなどといつておつてはならんのだ」

「はあ……」

「如何なることになるのではなくして、如何なることにするのじゃ、わかつたか」

「……ではやりませうか」

藤次左衛門は人をあやめる格好をしてみせた。

「恐ろしくはつきりものをいう男じやなあその方は。気違い坊主とはいえ、立正安国論の上書の手続き順序に一つの狂いもなく、まことに堂々たるものじや、軽々しくことをはこんではならぬい」

「では如何いたしましょうか」

「いいかなあ、これは指図ではないぞ、よく聞けよ。鎌倉に念仏を唱えるのはわれら北条一門のみではない。市中には無名のやからが念仏を朝夕一生懸命に唱えておるのだ。この人々は、常日頃念仏無間と悪口を言う日蓮のことを、くやくしく思っておるのだ。心から憎んでおるのだ。誰かが一寸でも日蓮をやれといえ、殺しもしよう、名越の草庵に火も放とうとさえ思っておるのだ。このことを今日までさせずにおつたのは一重に御政道の力があつたからだ。今その御政道の力がゆるんだとしたら如何なるか、今夜でも名越の方に当って火の手があがる。それも不思議ではない、誰れでもよろしい日蓮をやれと声をかけてみよ、おそらく数百人、いや数千人の念仏を唱える人々が、日頃の怒りに燃えて、たちどころに集まるであらう」

「殿、わかりました。わかりました。手前も念仏の信者でございます。黙って終りまで聞いておる訳にはまいりません。日蓮が小町の辻にあらわれてから今年が丁度七年目、念仏の信者も地獄

行きとの悪口を七年間指をくわえて聞いておりましたが、どちらが先に地獄にゆくかためしてみよう。よい時機がまいりました」

一一

聖人が座を立つた。草庵の居間の方からは弟子の日昭、日興をかこんで能登房や進士太郎善春等の信者達が互いに話合っている声がしておつた。

文応元年八月二十七日の鎌倉名越の聖人の草庵の夕方である。

法話を終つた聖人は、たそがれ時の草庵の庭に、なにげなく佇立せられた。秋をつげる山萩がこぼれるように咲いて、もう虫の音がその根もとにきこえておる。音もない聖人の足音をききわけ、この辺に多い、真赤な山の小がにが、さあつと逃げてゆくのであつた。きやつきやつという声に、聖人は崖の上を眺められた。それには何時ものように、夕方になると大勢でやってくる猿の群がいた。山猿の群があつまつて遊ぶさまをみたことのある人ならば、子猿が馬に乗つた若武者のように威張つた格好をして、母猿の尻の近くの上に乗つておるのをみて、微笑したことを忘れないと思つた。

母猿は自分の背中に子猿が乗つておるといふようなことには少しも頓着なく、自分の好むがま

まにさあと樹にとびつく、その瞬間子猿は小さな手を伸ばして母猿のお腹を抱いて急に母猿の背中に消えたかと思うほど、すいついてしまふ。その仕草の巧妙なことは思わず、あつと叫びたい程である。

さて名越の山にむれ集つた猿達は、崖の上から聖人の姿を眺めていたが、やがて立ち上ると両手を合せた。毎日のように草庵の近くに遊ぶうちに合掌するしぐさを覚えたのであろうか。

合掌の手をほどくと、きやあつきやあつと叫びながら、互いに手をつなぎ合せて、所謂猿真似の鎖をつくつたが、その端の猿は聖人の前に現われて手を差し出した。

なにげなく聖人が手を出すと、思つたよりも力づくよく、ぐんぐんと上に引つぱる。崖はゆるやかな傾斜なので猿真似の鎖が、思いの外たよりになる杖となつて聖人は崖の上に登つてしまつたのである。

昔越後の乙寺に法華經をたもつ僧があつて朝夕法華經を読んでおつたが、毎日のように、二匹の猿がきてはお經を聞いておつた。そこで或る日、僧が猿に向つて「お前達はお經をききにきておるが、お經を書いてやろうか」といつた。ところが猿は合掌して僧侶を拜んだ。僧はあわれ不思議と思つておつたが、五、六日すると数百匹の猿どもが椿の皮を銘々に背負つて僧侶の前に積んで帰つていつたのである。僧侶はそれを紙にすかせて、これに法華經の經文を書きつらねたが、その間二匹の猿は毎日いろいろな果物を運んできては僧を供養したのである。

こうして僧が法華経の第五の巻を書く頃になった時、二匹の猿の姿がみえなくなったのである。怪しく思ったが僧が山へ入って探すと、ある山の奥に、山芋をもったまま、頭を穴の中に入れて、逆さまになって二匹とも死んでおったのである。山芋を深く掘って、穴に落ちてあがることが出来ず死んだのであろう。僧は深く悲しみ、猿のかばねを埋めて法華経を讀誦して帰って来たのである。僧はその後写経を終らないで、寺の仏前の柱をほってその中にかきかけの法華経を奉納してその寺を去ったのである。その後四十余年をへて、紀躬高朝臣が当国の国守になってきたが、この乙寺に参詣して、その住僧に尋ねて「もしこの寺に書き終らない経がないであろうか」と問うた。すると昔の住僧がまだ生きておることがわかり既に八十歳ではあったが、そのお経のあることを語り、その由来を話したので国守は大いに歡喜して「自分はこの願を果さんがために、今当国の国守に任じられたのである。昔の猿は自分である。法華経の力によつて人身を得たのである」と語り、三千部の法華経を書いて寺に奉納したということである（この話は事実で、寺も現存すると、建長六年（文応元年をさかのぼる七年前）脱稿の古今著聞集に載せてある）

猿は仁獣ともいわれる。前述の話にも猿と法華経の話載せておる程だから、今名越の猿どもが、聖人の手を引いて崖の上へ登らせたからとて敢て不思議ではない。

やがてのことに聖人を中心にして、樹の上からも、聖人の右にも左にも、むれ集まった猿ども

は、けたたましい声をたてながら山奥へ山奥へと聖人をいぎなつてゆくのであった。

十町程も聖人が猿に誘われるままに山路をきた時である。背後の草庵の方角にあたつておびた
だしい人の騒ぎ声と馬の嘶きがきこえたのである。

それを聞くと、猿の叫び声はなお更に大きくなり大勢でがさがさと樹の枝をふるわせたが、聖
人が通られた路あとに沢山の枯れ枝を落して路をかくすようであった。

この時分、聖人の居られた草庵には、

「日蓮を殺せ」

「気違い坊主を逃すな」

「念仏門徒の仇を討て」

と口々に口汚く罵つて、てんでに松明、得物を手にしながら数百人の群勢が、草庵めがけて殺到
しておつた。

指揮をとるのは覆面をした馬上の武士であつた。草庵の四方から馬をすすめて、手綱さばきも
見事に、暴徒が草庵中に走りこまねばならんように馬を止動するのだった。勢あまつた暴徒は草
庵の中に松明を投げこんだ。

一瞬にして草庵は火に包まれた。

能登房、進士太郎善春等は、よく奮戦したが、これとても、弟子の日昭、日興を逃すために時

をかせぐ奮戦で、やがて時を見て二人とも暴徒から身をひいた。

暴徒は明らかに聖人一人を目的にしてきたらしく、弟子や信徒達の退散には手も出さなかった。みるみる草庵は焼け落ちた。聖人は出てこない。聖人は焼死したと思ったか、馬上の武者の合図に暴徒は風の如く去っていった。

やがて暴徒が襲来したことも、草庵が焼け落ちたことも、嘘ではなかったかと思うような、静寂があとを支配していた。

三

「日蓮という坊さんは殺されたそうだ」

「ええつ本当ですかそれは」

「しかも焼き殺されたという話ですよ」

「いつです」

「一昨日の晩ですよ、四、五百人の人数で名越の草庵を取りかこんで、火を放って嚴重に見張ると、弟子や信者の逃げ出すには眼もくれず、それまで草庵で説法をしておった日蓮坊主の出て来るのをまっつておったが、火が消えてもとうとう出て来なかったそうです。おそらく、あんな気

性のはげしい人だから見苦しいところを見られなくなかったので、火の中で死んだのでしょ

「そうですか、そりやあよかった。あんなに念仏の悪口をいったんですから、その位の往生をしなくても不思議はないさ」

「まったくねえ。天下の鎌倉、しかも執権職の屋敷ののき端に声がとどきそうな小町の辻で、念仏無間、禅天魔とくるんですからまあまあ普通じゃないですよ、よく今まで命がありましたねえ、何年つづいたかな」

「そうですねえ、忘れもしない、真夜中に逗子葉山の辺の東の方にあたって、大きな真白い虹がでた年でした。如何なる前兆かと思ったら、その年に日蓮坊主が小町の辻にたつて真言亡国、律国賊をはじめたのですよ」

「そりや、あんた、建長六年の年ですよ。してみると、今年で丁度七年間続いた」

「七年の間も念仏無間、禅天魔をやったことになるなあ、鎌倉には南には念仏の二万五千貫の大仏さま、北には有名な支那の杭州経山寺を本朝に移したといわれる禅宗の建長寺がある。これが二つとも今を時めく北条時頼公の建立だ。この方のお屋敷の近くにたつて、その念禅の悪口を七年間もたてつづけにいったんだから、考えようによっちゃ、大した坊主だが……」

「気違いですよ。気違いならなんとだつていえますよ、日蓮という坊さんは可哀想だが気違いですよ、私はそう思ってるんだ」

「ところが気違いなら往来でたんと悪口をいったって取締りようもなかるうが、日蓮という坊さんは気違いじゃなかったんだ。医者に聞いた話だけれど気違いの話は筋が通っていないというが、日蓮さんは筋が通っている。日蓮さんは立正安国論という書物を書いて前の執権職時頼殿に献上したんだ。しかもその書物の中でも、念仏や禪者の悪口をいうばかりか、禪宗や念仏を信仰しておると、北条一門に同志討ちが起り、や、がてはよその国がこの日本の国を攻めてくるぞ、といったようなことを書いたんだそう……」

「そんなだいたいそれたことを書いて、よくもお咎めがないもんですねえ」

「のんきなことをいつてるよ、この人は、日蓮という坊さんは、そのために焼き殺されたんだと話の最初にいつてるじゃあないかい、しつかりしなさいよ」

「ああそうか、本当、本当」

「これで鎌倉の名物が一つなくなつた訳か。南無妙法蓮華経。ちよつとといひ好い口調だねえ。しかし、家ごと焼き殺しちまうとは恐ろしく威勢のいいやり口だが、誰かの指金だろう。まさか執権職じきじきの御命令ではあるまいが……」

「それが執権職じきじきの口ききらしい、まさか前の御執権職時頼さまでは、式目（鎌倉時代の法律）の手前もあつて、そんな無茶なことはすまいが、今の御執権職は前の御連署重時さまの子供の長時さまだ。重時さまは極楽寺を建立されて、御自分のことを極楽寺入道観覚とさえいつて

おる程の大念仏者、その子供が執権職になったんだもの、念仏の悪口をいわれておって、黙っておるものか、重時さまがそれとなく匂わすれば子供だもの執権職も黙つてはおれませうまい」

「そうだそうだ、まったくだ。大体北条さまは代々が本家は禅宗、分家は御念仏と相場がきまっているんだ。悪口をいわれて念仏や禅宗の信者達が怒り出して火を草庵につけたというのは表面のことで、御指図はお上から出たのに違いない、そうでなけりや、名越には北条一門の屋敷（北条義時の子朝時）があるのに、その近くで夜討ちなどというだいたいそれたことが出来る筈がない」

「ああ、これで日蓮さんもおしまいか、大きな坊さんだったから、たいそう焼けどがあつたでしようぜ。ナムアミナムアミ」

文応元年八月の三十日、聖人の名越の草庵が焼かれてから三日目である。

鎌倉中どこへいっても日蓮坊が焼け死んだという話でもちきつていた。

念仏無間 禅天魔

真言亡国 律国賊

七か年も叫びつづけられた小町の辻に、焼き討ちのあつた日から、聖人の姿はみえなかつた。

「日蓮坊が焼き殺された」

鎌倉の街のうわさはいよいよ確実になった。

その頃、聖人は下総国八幡の荘若宮（千葉県市川市）の領主富木五郎胤継の屋敷に移っておつ

た。

聖人はこの屋敷で百か日の法筵を開き、太田乗明、曾谷教信、秋元太郎等々の有名な信者を得たのであった。